

ヘレン・ケラー女史と日本訪問

内田博幸

日本聾史学会

あらまし 三重苦のヘレン・ケラー女史（1880～1968年）。病気のため視覚・聴覚・言語の重複障害者となった。家庭教師アン・サリバン先生と出会って厳しく読み書きを習い、その後は大学を卒業した。アメリカの社会福祉活動家、著作家として活躍、世界で有名な偉人である。

1. はじめに

伝記「ヘレン・ケラー」をお読みでしょうか？

ヘレン・ケラー女史は、アメリカの社会福祉活動家として日本を3度（昭和12年・23年・30年）訪れた。その「日本訪問」を調査し、レポートしたいと思う。



映画「奇跡の人」：指文字「WATER（水）」

2. ヘレン・ケラー女史の生い立ち

2歳の時に高熱のため、視覚、聴覚、言葉を失った。電話機発明者のグラハム・ベル博士が紹介した家庭教師・失明者の

アン・サリバン先生はヘレン・ケラー女史を励ましながら、ヘレン家（しつけ、点字・指文字の会話）→ホレース・マン聾学校（発声法）→ライト・ヒューマソン聾啞学校（発声法と読信法）→ラドクリフ女子大学（現・ハーバード大学）で学んだ。文学士の学位取得、三重苦を乗り越えたヘレン・ケラーの名は世界的に有名になり、アメリカ各地をはじめ、世界各国をまわり講演を行った。その功績を讃え、アメリカ・フランス・日本の政府から名誉ある勲章が贈られた。87歳で死去。ワシントン大聖堂に、ヘレン・ケラー女史、サリバン先生、トムソン氏と共に眠っている。

3. 日本を愛したヘレン・ケラー女史

恩師サリバン先生が病気のため死去後、先生に代わりヘレン秘書と通訳のポーリー・トムソン氏と共に、日本を訪れた。

・1937(S12)年4月(57歳)・1948(S23)年8月(68歳)・1955(S30)年5月(75歳)
盲人・社会事業家の岩橋武夫氏は、親

友のヘレン・ケラー女史が日本に招待され、東京聾啞学校（筑波大学附属聾学校）をはじめ、日本各地の盲・聾学校を訪れ、講演を行った。講演回数は97回に及んだ。

＊岩橋武夫（1898～1954年）。大阪市出身で、早稲田大学在学中に網膜剥離のため失明。関西学院を卒業後、大阪市立盲学校（教師）、関西学院大学（講師）。1934年、ヘレン・ケラー宅を訪問し、日本の障害者に対して講演を依頼した。日本ライトハウス創設者（名誉総裁：ヘレンケラー）、日本盲人会連合会長、日本ヘレン・ケラー協会幹事長などを歴任し、身体障害者福祉法制定に尽くした。

4. ヘレン・ケラー女史のモニュメント

- ①宮城県立聴覚支援学校（ヘレン・ケラー胸像）



- ②新潟県立新潟聾学校（ヘレン・ケラーとサリバン先生の像）にモニュメント

ト（記念像）がある。



- ③岩手県立視覚聴覚支援学校（ヘレン・ケラー女史が来校、記念植樹）私立岩手盲啞学校開校記念として記念碑を建立した。



- ④宮城県立聴覚支援学校小牛田校（佐々木克彦さんが中学部卒業記念として「ヘレン・ケラー」を制作した。）



- ⑤神奈川県箱根の富士屋ホテル（史料展示室）にてヘレン・ケラーの展示がある。

★富士屋ホテルにご宿泊されたのは、

昭和12年来日の時、ヘレン・ケラー女史は和服を着て、ホテルで飼っていた高知県・土佐原産の尾長鶏（オナガドリ）を非常に可愛がった。「尾長鶏が亡くなって、ヘレン・ケラー女史が悲しかったのを知り、ホテルロビーの柱に彫刻「尾長鶏」を記念として作った。残念ながら2度目は来館できなかったが、ヘレン・ケラーゆかりの「尾長鶏」としてエピソードは今でも語り継がれているそうである。（ホテル支配人より）」との記事があった。

- ・ 富士屋ホテルHP（史料展示室）ほか
- 写真協力でお世話になった方々
- ・ 岩手聾史研究会（石川俊哉、佐々木徹、佐藤博一）
- ・ 日本聾史学会会員：佐藤 聖（新潟県）
- ・ 日本聾史学会会員：佐々木克彦（宮城県）



参考資料

- ・ 伝記「ヘレン・ケラー」、
- ・ ヘレン・ケラーに関するインターネット
- ・ 聾教育百周年のあゆみ
- ・ 筑波大学附属聾学校「同窓会史」
- ・ 長野県聴覚障害者協会機関紙「ろうあ信州（信濃聾史だより）」